ニュースあれこれ「三越と美術」

近代～現代　日本美術と三越美術部　　内村　宏（幹事：79年入社）

近代日本美術の流れを切り拓いた三越美術部の歴史を「三越美術部100年史」に基づきながら、代表的な展覧会などを紹介します。

1. 百貨店美術部誕生による美術の大衆化

1868年　明治政府が誕生し、元号が明治に
1887年　岡倉天心・フェノロサにより東京美術学校（現在の東京藝術大学）設立
1889年　東京美術学校開校
1898年　岡倉天心・横山大観らにより美術団体「日本美術院」が設立される
1904年　三越が株式会社化：呉服商からの脱却「デパートメントストア宣言」
　　国内外の商品・文化の紹介　初の文化展「光琳遺品展」が開催される
1907年　大阪店（9月）・日本橋本店（12月）に「新美術部」が新設される
1907年　第1回「文部省美術展覧会（文展）」開催　＊文展→帝展→日展と改称
1914年　日本美術院が再興され、「再興院展」が開催される

■ 三越美術部は美術展を開催し、それまではパトロンによる発注がほとんどだった日本画作品を、予め掛軸として表装し定価を付けて販売することなどで、誰もが美術品を鑑賞し、購入できる環境を生み出しました。
　また新作の制作を画家に依頼し、その作品の展示発表・販売をすることで、作家に対しても発表の場を提供しました。
　院展や、日本画の巨匠・川端龍子主宰の青龍社（＊）など、さまざまな美術団体に会場を提供し、美術の普及に貢献しました。

新設された美術部（日本橋本店）

＊青龍社については5・6ページ「川端龍子と三越」をご参照ください

【再興院展】 2025年（令和7年）：第110回（東京都美術館～全国巡回）
　岡倉天心の一周忌を機に、横山大観・下村観山等によって再興された日本美術院は、再興第1回展を日本橋本店で開催しました。その後は会場を変え、現在は東京都美術館を皮切りに全国を巡回しています。

2. 大戦中の美術の役割～戦後の復興と美術の発展

　戦時中の1940年（昭和15年）、皇紀二千六百年と画業50年を記念し、横山大観が海と山に因む各十題、計20点を描き上げ、日本橋の二つの百貨店で発表。三越では海に因む十題を、高島屋では山に因む十題をそれぞれ展観しました。
　全20点は即完売し、大観はその売上金50万円（当時）を陸海軍に25万円ずつ寄付。その寄付金で購入された爆撃機・戦闘機計4機は「大観号」と命名されました。

敗戦後、大空襲で大勢が死亡し、焼け野原となって落ち込んでいる東京都民に対し、明るい話題を提供するため「展覧会を開催してほしい」というGHQの要望により、終戦の1945年（昭和20年）11月、日本美術院が「院展小品展」（現在の「春の院展」）を日本橋本店でスタートさせました。今年は第80回展が3月末から開催され、その後全国10か所の百貨店や美術館を巡回中です。

一方、工芸部門では、1954年（昭和29年）に文化財保護の観点から、42名の工芸家により第1回「無形文化財日本伝統工芸展」が日本橋本店で開催され、その後「日本伝統工芸展」として、7部門から構成される、文化庁主催の唯一の公募展として発展し、続いています。今年は第72回展が9月に日本橋本店からスタートし、その後、全国百貨店や美術館を巡回しています。

また三越美術部初代主任の北村直次郎は、永樂善五郎や樂吉左衛門など茶陶作家の展覧会を積極的に企画。自らが命名した「千家十職」という言葉は、茶道を司る千家の家元の好みに応じて制作する職家を指し、茶道家憧れの道具の作り手を意味する言葉として茶道の世界において定着しています。

3. 美術のグローバル化と三越

三越は、昭和初期から海外一流作家の作品を紹介する美術展を継続的に開催し、それまで日本ではまだ馴染みのなかった世界を代表する美術作家の作品紹介を積極的に行ってきました。

【国際形象展】（1962年～1986年）

人間性豊かな形象絵画の創造を目指し、林武・荻須高徳など10名の同人が立ち上げた展覧会は、国内だけでなく海外からピカソ・シャガール・ビュッフェ・カシニョール等の画家を招待し、日本橋本店を会場に25回開催されました。

■ 海外美術文化拠点の開設

1992年（平成4年）、フランス・パリ市内の凱旋門に面した「将軍の館」と呼ばれる19世紀の建物に、「パリ三越エトワール」（**写真**）が開館しました。

日本画・陶芸など日本を代表する美術文化を欧州に紹介する美術交流空間として、パリ市民をはじめ欧州の美術ファンを魅了し、国際文化交流に大きく貢献。パリで開催された展覧会は、展観後、現地での反響を持ち帰り、帰国展として日本橋本店などで開催されました。

ニュースあれこれ「三越と美術」

■ 三越とオークション

三越は日本で初めて海外オークションを招致・開催するなど、海外オークションを活用したグローバルなアートビジネスを積極的に展開し、我が国の美術の国際化に大きな役割を果たしました。

1969年　国内初の公開オークションとして三越劇場でサザビーズ・オークション開催（**写真**）

1988年　ロンドン・クリスティーズにおいて、ピカソのパステル作品を47億円で落札

2008年　ニューヨーク・クリスティーズにおいて、運慶作とされる大日如来座像を14億円で落札（現在は半蔵門ミュージアムで展示中）

4．21世紀の三越美術部

■ 2007年（平成19年）　三越美術部創部100周年

マンダリンオリエンタル東京で記念レセプションを開催しました。また「美術部100年史」の編纂を行ったほか、平山郁夫展はじめ数々の記念展を開催しました。

■ 現代アートやコンテンポラリーアートへの取り組みを強化

2020年（令和2年）、三越コンテンポラリー・ギャラリー（日本橋）を開設（**写真**）

■ 新たな美術ファンの獲得に向け国内外のアートフェアに出店

■ 東京藝術大学との連携

教官選出若手作家による「三越×藝大：夏の芸術祭」展を2011年（平成23年）から開催しています。

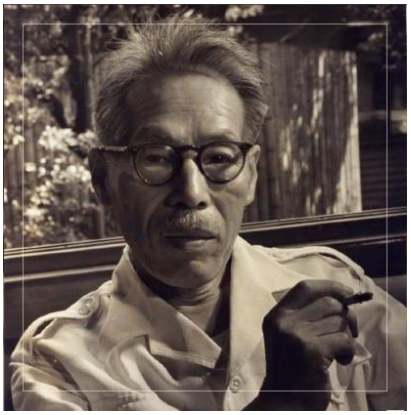
そのほか「藝大100年記念展」「藝大120年記念展」を三越・髙島屋で開催。また三越各店では教官や卒業生による展覧会を毎週のように開催しています。

再来年（2027年）、創部120周年を迎える三越美術部は、創部時の精神を受け継ぎながら、さらに新しい価値の創造に向け進化し続けています。

三越各店の画廊では、絵画や工芸・彫刻などの展覧会を毎週入れ替えながら開催していますので、ぜひ足を運んでご覧ください。

ニュースあれこれ「三越と美術」

川端龍子と三越　臼田裕昭（66年入社）



川端龍子
（大田区文化振興協会HPより）

川端龍子（本名：昇太郎）は和歌山市で生まれ、10歳のころ家族と上京し、浅草から蛎殻町に転居して生活していました。両親は日本橋と神田の間にあった「日本橋病院」で働いており、この病院は今、神奈川県の大規模な「鎌倉病院」として残っています。

府立三中（現在の両国高校）に通う

1903年（明治36年）、読売新聞社が「明治三十年画史」を一般募集した際、龍子は30年すべての年を応募。うち2年の作品が当選し、賞金を受け取ります。その後、学校を中退し、洋画研究所に入り、油絵の勉強を始め、23歳のころ、雅号を「龍子」としました。

洋画の勉強のため、28歳の時、単身で渡米

ボストン図書館でフランスの画家シャヴァンヌの色彩豊かな大きな壁画9点を見た龍子は感動し、何度も見に行ったといいます。またボストン美術館の東洋部門に陳列されていた「源平合戦の絵巻」（13世紀後半の作品）を見てたいへんな感銘を受けたそうです（この作品は2020年に東京都美術館で開催された「ボストン美術館展」で展示されました）。

半年で帰国し日本画へ

欧州に行く計画を変えて帰国し、洋画から「日本画」に転じて独学で習得。その後35歳で支援もあり大森の新井宿に住まいと画室「御形荘（ごぎょうそう）」を建てました。

1929年（昭和4年）、44歳で青龍社を立ち上げ、第1回青龍展を開催。第1回から第11回までは東京府美術館（上野）で、第12回から第37回は日本橋本店で開催しました。さらに1931年（昭和6年）に、当時、日本画では珍しい自身の個展を、1933年（昭和8年）には「春の青龍展」を開催しています。

三越で戦後初めての第17回青龍展開催へ

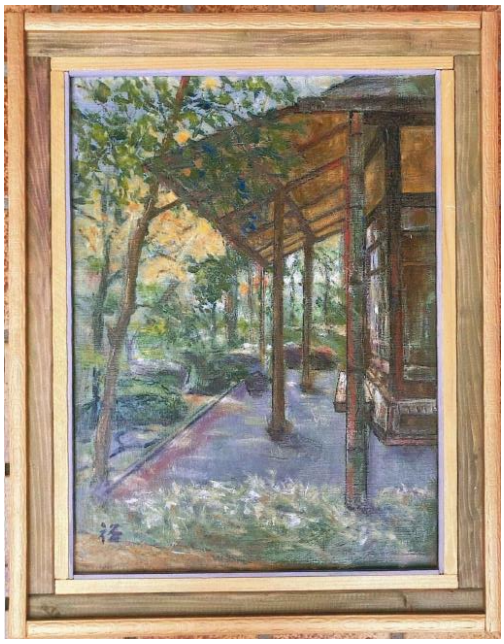
1945年（昭和20年）8月13日午前、爆弾が龍子の居宅がある庭に投下され、今もその跡が「爆弾散華の池」として残っています。終戦後、出品作品の「臥龍」を40日間かけて制作し、さらに10日間で「爆弾散華の池」を描きあげました。

同年10月、敗戦で沈む大衆を鼓舞しようと、他の美術団体に先駆けて終戦後わずか2か月で開催した青龍展は多くの来場者でにぎわいました。（☜ **次ページ参照**）

私費で美術館を建造

1959年（昭和34年）、74歳で文化勲章を受章。その後、78歳の時に自身の分身でもある作品の展示目的に「この世に自分がそんざいしていた証」として計画した美術館（現：大田区立龍子記念館）を建てました。そして1966年（昭和41年）、80歳で永眠。通夜の様子を「松明の火が燃え上がり飛び散り、三越と書かれた法被を着た人たちが忙しく動き回っていた。まるで映画の一場面のようだった」と、龍子の最後の弟子で、現在も活躍している高頭信子先生のお話が心に残ります。

ニュースあれこれ「三越と美術」



「秋の龍子公園」（筆者画）

「建築関係の仕事をしたかったのでは」
～仮に日本画家にならなければ～
（筆者の仮説）

龍子は蛎殻町の市立小学校に通っていた11歳から14歳のころ、図画の成績が優秀で日本画を描く教師が、彼の描く富士山、鯉、四季の花などの作品を見て気おくれがするほどだったそうです。

15歳くらいの学生時代、複数の新聞を読んでいます。さらにいくつかの龍子関連の書物に以下のことが書かれています。
「建物関連の洋書を取り寄せて掲載されている建物を模写していた」「辞書に載る建物を描き写していた」等。

ただし、なぜ建物に関心があったのか、その理由はどこにも書かれていません。
前述のとおり、「明治三十年画史」で当選。以降、龍子が建物に関心があるようなことは書かれてはおらず、19歳で学校を中退し、白馬会研究所に入り洋画の勉強をしています。

以下は筆者の推測ですが、「旧友会だより」2023年9月号および12月号に「日本の洋館」の記事が掲載され、「擬洋風建築」について紹介されています。これらは、明治初期に西洋文明が日本に流入し、生活習慣や文化が大きく変化した「文明開化」の表れでもあります。建築関係でも「日本の洋館」にあるように　大工や棟梁の解釈と卓越した技術で洋館らしき建物が各地で建てられました。

中学時代の龍子も、文明開化の考え方が街の建物にも表現されて関心があったのではと推察され、実際に彼が15歳から17歳の時（1900年ごろ）には、日本各地で擬洋風建築が建てられています。蛎殻町に住んでいた龍子には強い関心があったと考えてもおかしくないと思います。

☜　**青龍展開催時のエピソード**
第17回青龍展の準備の日、「3人の米水兵が会場に入ってきて、一人が竹内未明の『春日野』を購入して持ち帰った」と書かれた龍子の日誌が残っています。

臼田さんは龍子記念館・公園の北側に生まれ現在に至り、日々、川端龍子の足跡を調査・研究されています。また園内の風景を油絵に描き残しています。今回の美術特集に際し、ご寄稿いただきました。
（写真は「龍子記念館」（大田区HPより）